
もし私が扉を開けたら ~ Si j'ouvre une porte ~

鎖波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もし私が扉を開けたら
Si j'ouvre une porte

【Nコード】

N1336S

【作者名】

鎖波

【あらすじ】

あまのいのり
天野祈 18歳。卒業式を無事終え、家で昼寝をしていると物音で目を覚ました。

そして自室の扉を開けると、そこには美形の青年が眠っていました。そこから始まるわたしの異世界トリップ。
変わってしまった左目の瞳の色。重い重い愛の証。受難の日々。
わたしは何の後腐れもなく、無事元の世界に戻るのだろうか。

第1扉はじまり

物音で目が覚めた。

むっくりとベッドから起き上がって、窓の外を見ればもう夕方だった。

卒業式が終わって、家に直行してそのまま寝てしまったのだ。高校生活にノスタルジアを感じながら、わたしは寝癖のついた髪を手で整える。

この時間からして、両親のどちらかが帰って来たのだろう。仕事人間のうちの親は、娘の高校最後のイベントである卒業式にさえ来てくれなかった。

別にそのことにいちいち不満を言うほどコドモじゃないけど、退場の花道を1人で歩かなければいけなかったのは少し不満。在校生の目が痛かったし。

わたしはその時の情景を思い出して苦笑しつつ、扉に手をかける。

「おかあさん？それとも、とうさん？帰って来たの？」

声をかけながら、扉を開けた。

「まぶし……っ！？」

廊下に飾ってあった鏡に夕焼けが反射して、わたしは思わず目を瞑る。

目を閉じる前に、一瞬黒い人影が見えた気がして ……わたしの視界は暗転した。

第2扉〜美しいひと〜

次にわたしが目を開けた時、そこは落ち着いた寝室だった。

自分の家とは思えないその部屋は、全体を赤を基調とした色合いで纏められている。

天蓋付きのキングサイズのベッドが部屋の中央に位置し、今はピロイドのカーテンは開かれている。

ベッドサイドにある円形の小さなテーブルの上には、質素ながらも高級感溢れる鞆に納められた剣が無造作に置かれていた。

「ここは、どこ…？わたしは家にいるはずだよね…？」

ドアノブを触れば冷たい金属の感触が伝わってくる。

振り返って自分の部屋を確かめて見るが、そこには見たことのない廊下。

わたしの部屋が無くなっていた。

「……………Isjddj」

くぐもった声が耳に入る。

わたしはベッドの方をもう一度見た。

ベッドの豪華さと、傍にあった剣の存在感ばかりに目を留めていたが、よく見れば誰かが眠っていた。

なるべく起さないようにと気をつけながら、わたしは恐る恐る部屋の中へと足を踏み入れた。

昼寝をしていたせいで裸足なのだが、質の良い絨毯は足を一步踏み出すたびに沈んでなんだか申し訳ない気分になってくる。

汚れていないとは思っけれど、後でクリーニング代を請求されたらどうしよう。

「う、わ……」

そおつと眠る人の顔を覗き込んで、思わず感嘆の声を上げる。

白く滑らかな肌に、すつと通った鼻、整えられた細い眉。

閉じられた瞳は何色か分からないけれど、長い金色の睫毛。

夕陽の光を受けて輝く金色の髪は、程よい長さで柔らかく波打っている。

まるで彫刻のように美しい青年だった。

「つて、見惚れてる場合じゃないよね。ここがどこだか教えて貰いたいもん」

わたしは邪念を払うようにふるふると首を横に振る。

そつと眠る男性の頬に手をあて、ぺちぺちと軽く叩く。

初対面で失礼かも知れないけれど、今時の女子高生なんてそんなものだ。

……今日、卒業だったけど。

「d d d … ? s d l j d j d d … ……」

瞼がびくりと震えて、ゆつくりと開かれる。

アイスブルーの瞳がぼんやりとわたしを見つめて、何か言っているけれどさっぱり分からない。英語でもない。

明らかに西洋人の顔立ちの美形の彼が何を言っているのか、わたしには理解出来ない。

だが段々と意識が覚醒してきたのか、彼は突然現れたわたしという不審者に気づいて、
腰に来るような低い声で、驚いたように何かを叫ぶ。

「j d d j d j d l j d s k f k d ! ? 」

「え、何？分かんない……ってちょっと!？」

わたしが聞き返せば、彼はいつの間にかベッドサイドの剣を手に取り、
鞘から刀身を抜き放って、切っ先をわたしの左目へと向けて来た。

黒い刀身。

黒曜石のように輝く刀身に映される、金色の輝き。

「……………l j l j d . l d l k d d ? 」

美形の青年の纏う不穏の空気に、わたしは段々怖くなってきた。
わたしはゆっくりと後ずさる。
金色が何なのか一瞬ひっかかったけれど、今はそんなことを言っている場合ではない。

このままここにいれば殺される。

不法侵入者として殺されるかも知れない。

「う、ごめんなさい……!……!……! 」

顔面蒼白になったわたしは、それだけ言って後ろへ駆けだした。

「shh!」

本能の赴くまま、廊下へと飛び出し、玄関目指して走る。

後ろで美形の青年が待てだとかそんなことを言ってるのだと思う

が後ろから聞こえてくるが無視する。

外国のお屋敷みたいなそこを迷わず突き進める自分の防衛本能に感謝しながら、

わたしは転がり出るように外へ出た。

第3扉〜オッドアイ〜

「もう……なによこれ……」

屋敷から飛び出したわたしを待ち受けていたのは、広大な庭もとい巨大迷路。

赤いポインセチアのような花がついた植物の壁に手をついて、わたしは半泣きになりながらもとにかく進んで行く。

後ろから美形の青年は追って来ていないようだったが、戻ったところでどうしようもない。

「うん、諦めよう。でも、せつかく手入れしてるっぽいのに……ああ、ごめんなさい！」

自分に言い聞かせ、わたしは植物の壁に突っ込んだ。

迷路をクリアする方法としては邪道だけど、手段を選んでいる暇はないのだ。

髪が枝にひっかかるたびに解き、肌が葉で傷つけられるたびに痛みを顔をしかめる。

そして10ブロックほど壁を突っ切って、ようやく脱出できた。

石造りの噴水に迎えられ、なんだか喉が渴いた気がするわたしは、花の蜜に吸い寄せられる蝶のごとく、噴水に近づいた。

行儀悪いかも知れないとは思いつつ、澄んだ水に手をつける。

「衛生面大丈夫かな？まあ、なんとかなるか」

水を掬くいあげて、わたしは我が目を疑った。

もうまさしく我が”目”を……！！

「な、なんで金色になってるの…!？」

左目を抑えて唾然とする。

おかしい、おかしい、おかしい。

確かわたしは生粋の日本人で、両目は確かに黒かったはず。

もしやさつき刀身に映っていた金色の光は、わたしの瞳の色？

美形の青年の髪か、夕陽がいい感じに反射していたのかと思っただけ。

ああそれなら納得がいく。妙にあの美形の青年、わたしの左目を見て驚いていたし。

だから切っ先を左目に向けていたのか。

目が覚めて急にオッドアイがあったらビックリするよね、うん。

とかなんとか考えているうちに冷静さを取り戻したわたしは、掬った水をそのまま飲み干した。

ごくりごくりと喉を鳴らせば、砂漠に降る雨のように渴きが癒えていく。

「さて、これからどうしよう」

水を飲んで人心地ついたところで、

巨大迷路の向こうからでも十分大きく見える屋敷を見上げて呟いた。

屋敷に戻ってあの美形に殺されるのは後味悪い。

何度目になるか分からない溜息を吐いて、わたしは屋敷とは反対の方角へ歩きだした。

裸足だから歩いたびに砂が爪先に入ってきて気持ち悪い。

門を通り抜けた先に、店か何かあればいいなと思いつながら。

「緊張感が無いってよく友達にも怒られてたっけ」

大学入試第一の関門であるセンター試験の当日のことを思い出して、わたしは思い出し笑いをする。

全く見知らぬ土地、見知らぬ人種：は言い過ぎかな。西洋人っぽいし。

でもきつとなんとかなる。

そう楽観的に考えながら、わたしは歩く。

「せめて日が暮れる前に、寝る場所だけでも確保したい……」

それだけは切実。

第4扉〜路地裏で〜

「sjd1jdl1s」

「dskddsdldhdd?」

陽が完全に落ちた暗い路地裏で、わたしは柄の悪い男2人に絡まれていた。

テレビで見たことのある北欧風の街並みを歩いていたら、突然連れ込まれたのだ。

相変わらず訳のわからない言語で何か言われる。顔が近い。髭が顔にあたって、くすぐったい。ていうか吐く息が臭い。

確かに、あの街並みでわたしは浮いていた。

なんていうか自分で言うのもなんだけど、かなり黒ずくめで人目を惹いていたと思う。

この夢の世界の人たちは、基本的に色素が薄いというか、明るい髪色や目の人が多いのだ。

だから悪目立ちした。服装からしてわたし制服だったし、それに裸足だったから。

自己嫌悪に陥りながら、何気なく再び男たちのほうに目を向ければ、下品な笑みで髭男がわたしの胸へと手を伸ばそうとしていることに気づく。

「さ、触らないで…」

咄嗟に、ばしんと音を立てて、伸ばされた手を振り払った。

「djjjdsjjdjd!?!?」

「d j l d j l d h k s h f k d s l f s l ! ! ! !」

あ、やばい。何か刺激しちゃったみたい。

わたしは、はははと乾いた笑みを浮かべる。

目がマジだ。

「痛い…っ」

無遠慮に手首をつかまれ、顎をくいっつと持ちあげられる。

男のうちの髭がない方が、わたしの左目を指差して何か言っている。

そして今度こそ明らかに意図を持って伸ばされた手に、拘束された

わたしは抗う術がない。

「誰か…助けて…っ！」

わたしは目を瞑った。

第5扉〜眠りの恐怖〜

ぐちゃり、と嫌な音が聞こえた。

次いで、男たちの野太い断末魔。

痛いほど強く握られていた手首の拘束がなくなり、頬に生温かい液体がかかる。

「え……」

怖々と目を開ければ、髭男が脇腹辺りを押さえて地面でのたうち回っていた。

駆け寄るように、もう一人の男が何か早口でまくし立てている。

そんな男たちの後ろに、場違いなほど貴族然とした美形の青年がいた。

片手に例の黒刀を持ち、凍りつくような冷たい視線で男たちを見ている。

「さっきの……」

わたしを殺そうとしていた美形の青年だった。

身体にぴったり合った黒い軍服を着ていて、

路地裏の生温い風によって闇色のマントがはためいている。

彼の金色に輝く髪とは不釣り合いなその出で立ちは、

まるで夜に浮かぶ月のようだった。

静粛で、厳かで、どこか恐ろしい。

「……l d s。 s d s j l」

青年が何かを言って、黒刀の刀身を煌めかせる。

夜と夕暮れの狭間で、妖しい輝きを放つその剣に畏怖の念を覚える。わたしがふるりと恐怖で身体を震わせば、

青年に殺気を直接向けられた男たちは肩を寄せ合い逃げるように表へ走り去った。

髭男の傷口から流れる血が、点々の染みとなって地面に跡をつけながら。

「…… s d h k h d s。 d l j s d？」

青年の瞳が、今度はわたしを映す。

感情を宿さない、ビー玉のような瞳。

血に濡れた剣が今度はわたしに向けられる。

「d l j d s d j？」

助けに来てくれたのかもだなんて都合の良い幻想だったみたいだ。

相変わらずわたしにはただの雑音にしか聞こえない言葉で、

美形の青年が何かを言うってくる。

剣の切っ先はわたしから外れない。

「分かんない。あなたの言うてること、全然分かんないよ……」

涙が溢れてくる。

泣き落としみたいで嫌だな、女々しい。

大きくなるにつれて、あんまり泣かなくなったというのに。
これじゃ子どもみたいだ。

「……………dd:。」

”sleep” j s j d、d h k h d s
r

馴染みのある英単語が聞こえた、と思った。
驚いて青年の顔を見れば、逆にびっくりされたような顔をされる。

青年が何か言い終わると同時に、わたしは黒色の靄に包み込まれた。
逃れようとしても実体のないそれに、抵抗らしい抵抗など出来るはずもなく、
靄がわたしの身体に溶け込んでいく。

「じ……………わ……………いつ」

意識がどんどん遠のいていく。
瞼が鉛のように重たくなって行く。

そうだ、彼は『sleep』と言った。

眠れ、と。

わたしは強制的に襲ってくる眠気に怯え、目の前の青年にも怯え、
薄れゆく意識の中でただただ涙を流すしかなかった。

「じわ……………いよ……………」

助けを求めるように手を伸ばして

…そこでぷつりと意識が

途切れた。

第6扉／浴場で愛を誓われる

身体中を這いまわる手のくすぐったさで目を覚ました。

「……………ひゃんっ！！……………て、あっ」

「……………dsldl?」

目の前には、何故かわたしを心配そうに覗き込む美形の青年。殺されかけたというのに、青年はひどく気遣うようにわたしの身体を洗ってくる。

巨大迷路を無理やり突破した時に出来た擦り傷が湯に染みて痛い。

きよろきよろと辺りを見回せば、プールのように広い浴室…否、浴場だった。

白と緑の大理石を基盤とし、獅子の像の口からは湯が流れ出ている。ミルク色の湯には桃色の花卉が浮かんでいて、可愛い。

そうして辺りを彷徨わせていた視線が、目の前の青年を捉える。

「じゃなくて…！！…なんで、わたしたち裸なの……………っ?!」

慌てて青年から離れて、湯に首まで浸かって隠れた。

色つきの湯で助かったと安堵したものの、恐らくさっきの感触と状況からして、

もうわたしの身体はあますところなくこの美形の青年に見られたわけ、

そこに思考が行き着くと、羞恥から首まで真っ赤にし、わたしは青年をきつと睨みつけた。

「jkljll。::dlljldj」

どこか困ったように首元をかきながら、青年は苦笑する。まったく何を言ってるのか分からない。謝ってくれてるのだろうか。凍てつくようだったアイスブルーの瞳は、今や春を待つ雪のように穏やかだった。

だから、警戒心が解けた。

「fbdk sbkds。:::Eddlスト」

青年は自分の胸を親指で指しながら、自分の名前を言う。やっぱり完全には聞き取れなくて、わたしは首を少し傾げた。それでもどこか彼が期待するようにこちらを見るので。::。

「::エスト？」

小さく躊躇いがちに言えば、青年は。::エストは微笑んだ。

照れたように濡れた前髪をかきあげ、はにかむように笑う。ぼんやりとした明かりと、湯気を纏ったエストは、壮絶な色気を放つ。

その場に縫い止められたように動けなくなったわたしは、どンドン距離を詰めてくるエストをただ見上げているしかなかった。彼がわたしのセミロングの黒髪に触れる。

エストの角張った指が頬にあたって、くすぐったさで肩を竦める。

「I, take you, to be my wedded wife. To have and to hold,

from this day forward, for better, for worse, for richer, for poorer, in sickness or in health, to love and to cherish, till death do us part. And here I pledge you my faithfulness.

英語は書くのは得意だけれど、耳がよくないから聞き取るのは苦手だ。

それでもなけなしのリスニング能力で聞き取れた単語を統合すると、

妻。貧しいとき。病気。愛。死。別つ。

まさかと思ったときには、もう遅い。

エストは無遠慮にわたしの脇に手を入れてその場に立ち上がらせ、恭しい態度で、わたしの控え目な胸に口づけを落としてきた。

「あ…ん…っ」

ぴりつとした痛みと、得も知れぬ感覚に身体が震え、わたしは変な声を出してしまっ。

足ががくがくと震え、立っていらなくなる。

目の前がチカチカと点滅する。世界がくるくる回りだす。

「へ…んたい…っ」

そんなわたしの様子に目を白黒させるエストにそれだけを言い放つて、意識をフェードアウトさせた。

第7扉〜言葉が通じた！〜

ひんやりとした固いものが額の上に乗せられる。

気持ち良いと思いつながら、重い瞼をあげれば、心配そうにわたしを覗き込むエストがいた。

どうやらわたしはまだ夢を見ているらしい。

彼はわたしの頬に汗で張りついた髪を払う。

そしてわたしが目を覚ましたのに気がつく、その美しい顔で微笑んだ。

「のぼさせたようだ、すまない」

短く謝罪をし、軽く頭を下げられる。

「頭を上げて下さい、わたしなら大丈夫です。…それより、あのお風呂場での出来事は…。というか、この痣のようなものは？」

言いながら思い出して、赤面する。

それもこれも全て目の前の美形の青年 エストのせいなのだけ
れど。

いつの間にか着せられていたバスローブを緩めて、胸元を見せる。

エストに口づけられて痛みを伴ったそこは、深紅の複雑な紋様が刻まれていた。

「……言葉が通じているのには、気が付いているか？」

「え、あ、そういえば」

指摘されて気がつく。

「改めて、俺の名はエルネスト・ヴィ・ナイトロード。そして君の胸にあるそれは、刻印。 >永遠の愛くだ」

「永遠の、愛？じゃあこれはやっぱり婚姻の証か何かですか…？」

「……分かったのか？>混沌の言葉くが」

「混沌の言葉？だってあれは英語でしょう？」

「……エイゴ？……とにかく、文字も読み書き出来るようになってるだろう」

「あの、エルネストさん」

「……エスト、でいい。先ほどみたいに」

「エ、エスト？」

「ああ」

おずおずとエストの名前を呼べば、彼は満足したように頷く。

勘違いしそうになるくらい甘ったるい瞳で見つめられて、わたしは堪らなくなる。

そしておもむろに立ち上がったエストは、自分シャツのボタンを外し、上半身を露出させる。

「君の名前を教えて欲しい」

「へ？天野祈です。イノリです。…てか、どうして脱いでるんですか？」

「そうか、イノリ。では此処に誓いの口づけを」

わたしの疑問を華麗にスルーして、エストは自分の心臓の上を親指で指した。

第8扉く&It・永遠の愛>

>永遠の愛<

それはこの世界もとい、この国　神聖王国レグナムに残る古の誓いらしい。

>混沌の言葉<と呼ばれる呪文を唱え、互いの心臓に口づけを贈ることで成される。

至ってシンプルな儀式であるが、その効果は絶大で、代償も大きい。

円滑な夫婦生活のために互いの言語、感情、危機を刻印を通して把握出来る代わりに、

刻印に伴侶ではないものの口づけをされると心臓が永遠に止まってしまう。

かつてこの刻印を悪用した者がいるらしく、その代償のために、現在のレグナムは>死の刻印<として忌み嫌われ、殆ど使用されていないらしい。

「　変な女につけたもんだね。……ま、でもキミの不幸中の幸いは、

キミがまだエルネストに刻印を与えてないことだね」

エストに口づけを強請られていたわたしを助けてくれたのは、銀髪の美少年だった。白の法衣を着て、派手な装飾の杖を持った彼の名前は、
ウィルド・ラーグ。別名”銀色の魔術師”と呼ばれる、世界最強の魔術師らしい。

ウィルドは部屋に入って来るなり、魔法でエスト吹っ飛ばした。壁に背中を強打して顔を歪めるエストと、啞然とするわたしを見て、物凄く不快なものを見たというな目で見てきた。

そして状況を飲み込めないわたしにさっさと自己紹介をし、状況説明してくれた。

「僕だって信じたくないけど、キミは異世界から来たみたいだね。左目は、その影響じゃないかな？」

何の後腐れもなく元の世界に戻りたいなら、>永遠の愛<は絶対成立させないこと。

エストの心臓に口づけるのは勿論、契るなんて論外だから」

「ち、契 ……!?!」

「あれ、感じたでしょ?そこに口づけられたとき、快樂が ……」

「うわああああ!ちよつと黙って…!!!!」

綺麗な顔をしてとんでもない発言をしようとするウィルドに、わたしは枕を投げつけた。

不意を突かれた形となった彼の顔に枕が見事直撃する。

羽毛入りの超柔らかい枕だったので、ぽすっというなんとも間抜けな音を立てて落下した。

「乱暴だなあ!キミは!凶星だからって暴力に訴えるのはやめてくれる?僕、ムカついた」

青筋をぴくぴくさせながら、不敵な笑みを浮かべるウィルド。

「だ、だってセクハラです…!!!」

「せくはら？なにそれ。意味分かんない。お行儀の悪い子には、ちやーんと説明してあげる。」

その刻印をつけられると、快楽が身体中を駆け巡って、目の前の伴侶にどーしようもなく欲情しちゃうんだ。そこで契つたら、

誓いは成立して、もう一生解けない。まあ幼いきみは、それで倒れちゃったみたいだけど？」

「くっ…!!!お、幼くなんてありません！わたし、18歳ですし…!!!」

「へー？それは驚いた。せいぜい13かと思ってた。……胸の発育的に」

「失礼な…!!!」

無遠慮に向けられる胸元への視線に、思わず前を隠す。

ウィルドが本気で驚いているのがムカつく。

いつの間にか復活したエストまでも僅かに目を見開いてるのが余計にムカつく。

エストは、わたしのこと一体いくつだと思って>永遠の愛くを誓ったのだろう。

「じゃあ教えてあげるけど、キミはエルネストにこれから欲情し続けるんだ。」

その刻印が胸にある限り、ずっとね。で、キミはエルネストを恋慕う女どもに嫉妬される挙句、

その刻印に口づけられたりしたら、もうお終い。死ぬんだ」

「嘘！そんなの嘘でしょ?!」

ウィルドの意地の悪い言い方に、泣きそうになる。

扉を開けたら異世界でした。それだけでも十分嫌になるというのに、

その上呪いまで？

絶るようにエストのほうを見れば、彼はまた罰の悪そうな顔をする。

「イノリ、俺の胸にも口づけを」

呪いのような誓いの魔法をと知りながらも、まだ自分に口づけを強請ってくる男の気が知れない。

「絶対に嫌」

涙が溢れてくる。

それをバスローブのタオル地の袖で拭いながら、力強く首を横に振った。

「何故」

「あなたにまでこんな呪いのようなもの　背負わせたくない。

わたし、帰るの。ちゃんと、帰るの。

責任取るうと思ってるんでしょ？そんなの、いらない。

言葉が通じるようになっただけでも感謝してる」

そうだ。わたしは帰るんだ。

何の後腐れもなく、無事に。

>永遠の愛くだって解いてみせる。
絶対にエストに口づけたりしないし、契るなんてしない。

「帰るの……帰ってみせるんだから！たとえ、わたしが ……」

顔を上げて、ウィルドの銀色の瞳を強く睨みつける。

「sleep」 まどろみの闇に包まれる

わたしが決意を宣言する前に、

英語 この世界での>混沌の言葉く、魔法の呪文をウィルドが紡いだ。

「ど……しど……」

抗えない睡魔に襲われる。

鉛のように重くなっていく瞼を必死になって開けて、ウィルドを見る。

「耳障りだからちよつと黙っててよ。」

次にキミが目を覚ませば、何もかも上手く行くようにしてあげるから

口元だけ笑みを作ったウィルドの銀色の瞳は、硬質な鉄のように冷徹だった。

第9扉〜密談〜

*

「change” 彼の者を我の思惑へ添わせ」

眠りに落ちた祈の顔の上に掌をかざし、呪文を唱える。

詠唱に呼応し、杖の先端に付いた宝石が輝き、室内を眩く照らす。

ウィルドはふうと息を吐いて、呆然とするエルネストに顔を向ける。

「キミって馬鹿なの？エルネスト。この女は不穏分子だよ。

意思の疎通なら、僕の到着を待てばよかった。

キミは”騎士”なんだ。忠誠を誓う相手を間違えてちゃ意味がない」

「……”騎士”としての判断だ。多少、私情が入ったのは認めるが」

「なに、惚れたとか？」

「違う。怯えていた。守らなければならないと思った」

「なら、逆効果だよ。>永遠の愛くなんて重すぎ。……まあ、僕が記憶操作しておく。

僕らの国 ……レグナムで生きやすいようにね。彼女は魔術師としての資質が高そうだから、

僕の弟子にしてあげる。小間使いって言い方が正しいかもだけどね」

言いながら、ウィルドは再びイノリの顔の上に手をかざし、二言三言呪文を唱える。

「それに、陛下が会いたいって言ってたし丁度いいでしょ」

「……陛下はなんと仰っていた」

「さあ。とにかく会いたいってさ。僕には彼らの考えなんて理解できないし、したいとも思わないね」

ウィルドは言いながら自嘲気味に笑う。

杖で床を2回叩けば、杖を中心に魔法陣が展開される。

「異世界の人間なんてレグナムではただの不穏分子だ。しかも、この見た目なら余計に。」

とりあえず僕らには無意識にだけれど逆らえないようにしておいた」

「……………」

黙り込んだエルネストを、ウィルドは目を細めて笑う。

「あはは、僕のやり方って邪道？気に入らない？」

「……別に」

「ふうん？いいけどね。　じゃ、また王宮でね。くれぐれも情に絆されないでよ」

ひらひらと手を振ってから、ウィルドは小さく呪文を呟いた。

魔法陣がより一層光輝き、足元から塵となってウィルドの姿が消えていく。

「きつと今も視られてるんだろーね」

眠る祈に目を向けたあと、天井の一角に目をやる。
口角をつりあげ、ウィルドは銀の瞳を閉じた。

第10扉〜誓い〜

少し眠っただけで頭がたいぶすつきりした。

お風呂場でのぼせたわたしをエストが介抱してくれて、世界最強と自分で豪語する魔術師ウィルドになんか色々説明されてから、

どうやらわたしは疲れて眠ってしまったらしい。

寝息が聞こえて目をやれば、エストが椅子にもたれて、腕を組んで眠っていた。

わたしがベッドを占領していたせいで、椅子で眠るのを余儀されなくなりたらしい。

申し訳なさを感じると同時に、不意に刻印のことを思い出した。バスローブの隙間から覗く深紅の刻印に触れる。

触ると熱を持ったように感じ、脈打つ鼓動の速さ増す。

「責めないのか、俺を」

「！」

いつ気がついたのか、エストがこちらをじっと見つめていた。

刻印のことは気にかかるけれど、エストが善意でやってくれたことなのだから受け入れられる。

おかげで言葉が通じるようになったんだから、責める必要なんてないと思う。

そりゃちょっと許せないけど、早々命の危険に晒されるようなこと

はないだろう。多分。

「責めたりしません。強いて言うなら、最初にわたしを殺しかけたのを謝って欲しいかも」

わたしは悪戯っぽく笑った。

「……………それがお前の望みなら。これから、イノリのごとは、俺が守ると誓う。」

だから、すまなかった」

言いながら、エストの固い指先が、刻印を撫でる。

「……………んっ」

皮膚に触れられた瞬間、くすぐったくなって思わず身をよじった。

「す、すまない」

わたしの声に、エストが慌てて指先を離した。
心なしか耳が赤くなっている。

「大丈夫、です。あつても、わたしはエストには誓いませんから。
あなたにまでこの刻印を刻みたくありませんし、それに男の人って……………」

クラスの男子の会話を思い出す。

エストが何歳か分からないけれど、成人してる大人の男性には間違いない。

わたしが口に出すのも憚れるような大人の事情だつてあるはずだ。

ウィルドがわたしを中学生と間違えてたくらいだから、こんな小娘の身体で満足出来るとは思えない。
快く送り出してあげなきゃ。エストはわたしの保護者なんだから。

「……ああ、無理強いはしない。優しいな、イノリは」

頭にぼんつと掌をおかれ、撫でられる。

明らかな子ども扱いに、やっぱりわたしは彼にとって子どもなんだなと確信する。

エストを束縛するようなお荷物にはならないようにしよう。

窓から差し込む月の光を受けて輝くエストの美しい金髪を眺めながら、

わたしはそう決意するのだった。

第11扉〜朝〜

隣で人がもぞもぞと動く気配がする。

小鳥のさえずりが聞こえ、カーテンの隙間から差し込む朝日が眩しい。

「まだ…早いよ……」

隣で眠る起きようとする人物に抱きついて、その頭を自分の胸元へと引き寄せる。

さらさらの髪が寝巻から露出した肌にあたってくすぐりたい。

わたしはくすぐす笑いながら目を開けて ……固まった。

「……イノリ、おはよう。鍛練に行きたいのだが、離してくれないか」

わたしの腕の中には、エストの顔。

寝癖一つない彼のさらさらな金髪が目にも痛い。

「あ…あ、え、あ、ご、ごめんなさい!!!」

わたしは慌てて離して、エストから距離を取る。

キングサイズの広いベッドの端へ移動し、正座して顔を伏せる。

エストの言い分としては、傍にいた方が守りやすいからと、

彼のベッドでずっと毎晩夜を共にしている。

これにいかがわしい意味は一切含まれていない。

というのも、わたしの容姿はこの世界でひどく異質らしく、

人買いに狙われる可能性があるらしい。

確かに言われてみれば、初日に絡まれてしまったことを思い出す。

今でも虫唾が走るような感触を思い出して吐き気がする。

エストが助けに来てくれて本当によかった。

でも、どうしてわたしがあそこにいると分かったんだらうか。

「どうかしたのか、イノリ」

「え？ううん、なんでもない。…でも、わたし寝相悪いからエストの迷惑になってない？」

流石は騎士というべきか、エストが手を出してくるような気配は微塵もなかった。

むしろ、わたしのほうがさっきみたいにエストにひつついてる。無意識だけだ。

「……お前は良い香りがする。だから、気にするな」

シャツのボタンを留めながら、エストは真顔で言う。

「へ、変態チツクだよ……」

「ちつく…?」

そうだ、匂い に関して言えば、エストのほうが良い香りがする。特に、夜寝る前は香水の良い香りがする。

そしてそのことを指摘すれば、エストは何故か困った顔をするのだ。理由は教えてくれない。今度誰かに聞いてみよう。

たとえば、屋敷の執事であるエヴァンスさんとか。

相変わらず英語の意味を理解してくれないエストの不思議そうな顔をニコニコ眺めながら、

わたしはベッドサイドに置いてあるブラシを手にとって髪を梳き始めた。

エストに倣って、わたしもこれから早起きしよう。

第12扉 朝食の席で

朝食の席で、二人でご飯を食べていた。

グラスの水が空になれば執事のエヴァンスさんがさり気なく注いでくれる。

おいしいパンとなんだかよく分からないジャムに満足していれば、突然ぼんつという音とともに白い鳥が現れた。

実体のない光のように揺らめく白い鳥。

新聞を片手にパンを齧っていたエストの肩に止まって、吸い込まれるように消えた。

「うっえ!？」

驚きのあまり奇声を発して、ナイフを落としてしまった。

がしゃんと銀のナイフが食器にあたって派手な音が鳴った。

自分のマナーのなっていない態度に落ち込んで周りを見るが、

エヴァンスさんは穏やかに微笑み、エストに至っては平然としていた。

なんだか気にしてる方が恥ずかしい。

「イノリ様。あれはウィルド様がお使いになる使い魔の一種ですよ。伝言を伝えて下さるのです」

そう言って、初老のダンディな執事 エヴァンス・リッチさんが

丁寧に説明してくれる。

エヴァンスさんはどの馬とも知れぬわたしをお嬢様扱いしてくれる。

エストの屋敷の唯一の使用人にして、最高の執事らしい。

「……ああ。どうやら、ウィルドが、お前の魔術師の先生になることが正式に決まった。」

イノリは異世界人だし、才能がある。丁度いい」

「ええつ。ウィルドが……」

嫌な名前を聞いたなど、わたしは重い溜息を吐いた。

何故かウィルドからは、初対面の時から思いつきり毛嫌いされている。

後でエストから聞いた話、彼とわたしは同い年らしい。

どうやらわたしは魔術師としての資質が高いらしく、昼間エストが王宮の騎士としての仕事をしている間、ウィルドのもとで勉強すればいいらしい。

確かに魔法があれば便利だし、元の世界に戻る方法も見つかるかも知れない。

そう考えていると無意識に刻印のある辺りを触っていたのか、エストがわたしの胸元を凝視しているのに気がついた。

「エスト？」

「……その刻印は、1年経つまで解けないらしい。すまない」

エストの心臓に口づけけない、契らない。

> 永遠の愛くを解くための絶対条件。

憤み深い日本人のわたしが、自分からそんなことするなんて有り得ない。

1年待つぐらい簡単だ。

問題は、異世界に戻る方法を見つけられるかどうかってことのはうだ。

「大丈夫！それに謝られるより、わたしが元の世界に帰る方法を探してくれたほうが嬉しいし」

安心させるように微笑みながら言えば、エストは虚を突かれたような顔をする。

アイスブルーの瞳を細めて、優しいなと言って彼は柔らかく笑う。

最後はちょっとした皮肉を言ったつもりだったんだけど、エストには全く通じていないらしい。

わたしは苦笑しながら、彼にされるがまま頭をくしゃくしゃと撫でられた。

第13扉〜ヴェリスの月3日〜

この国にも日本と同じように四季があるらしい。

過ごしやすい温かな気候と花の香りが素敵だ春のような季節は、ヴェリス。

日差しが強く夜が短い夏のような季節は、アエスタス。

涼しげな風が吹く豊穡の季節は、オータムナム。

生き物の気配がなくなり七色の雪が降る季節は、ハイエムス。

4つの季節がそれぞれ90日ごとあり、毎季節大きなお祭りがあるらしい。

今の季節は、ヴェリスの月3日。

30日目、60日目、90日目にお祭りがあるので、楽しみにしているといいとエストに説明された。

「……30日目の祭りは、今年は関係ないが」

エストの書齋で羽ペン片手にこの世界の常識についてメモっている
と、

彼は顎に手をやって目を伏せた。

「どんなお祭りなの?」

「……言えない」

「どづして?……渋られたら逆に気になるんだけど!」

あからさまに視線を逸らすエスト。

わたしは勉強専用に着意された机をばしっと叩いて身を乗り出した。
ああなんかエストの前ではかなり子どもっぽくなってしまっ
もう18歳なのに、うっ…。

「……来年、な」

身を乗り出した頭をぽんぽん叩かれる。

「来年って……その頃には、エストの傍にいないんだからね」

わたしは不貞腐れたように俯いて小さく呟いた。
心臓の位置にある刻印に手をやる。1年後に解くことが出来る、永
遠の愛く。

それまでに帰る方法を見つけて、いや見つからなくても、
エストの元から離れるんだ。1年もあれば自立出来る。

「何か言ったか？」

「なんでもない」

顔を覗きこまれて、わたしは首を振った。

甘やかされてるなと思う。

エストが優し過ぎて、なんだか自分が駄目になりそう。
中毒性のある甘い麻薬みたいだ。

第14扉だから、そんな目で見ないで

エストは特別な騎士の一人で、この国の王直属の騎士。

単独での任務が多くて、他の一般の騎士とは殆どいることがなくて、王宮にも忙しくていられないらしい。

「……だから、王宮では滅多にイノリに会いにいけないんだ。すまない」

空に浮かぶ宮殿パラチウムに向かうための乗り物・フェローシスターの中で、エストに申し訳無さそうに説明される。

ちよつとエストの顔が見えないだけで泣きだすような子どもじゃないんだから、

そんな心配はいらないのに、彼は酷く子ども扱いをしてくる。

それがなんだか悔しくて、わたしは少し脹れっ面をする。

東洋人は若く見える顔立ちをしている ……とあっちの世界で言われていたように、

どうもエストはわたしに対する子ども扱いが抜け切れてないと思う。

「全然平気だつてば。ウィルドが嫌な奴じゃなければ、

あの人のところにお世話になつてもいいくらい大丈夫だよ？」

ひらひら手を振りながら答える。

それよりもフェローシスターって変わつてる。

パラチウムに行くための唯一の交通手段であるそれは、大きな硝子の箱なのだ。

快適な空の旅を約束するために、当然硝子には魔術記号が刻まれている。

わたしの世界の英語。でも、この世界では「混沌の言葉」と呼ばれ

るものだ。

フェローシスターを運ぶのは白いドラゴンで、赤い瞳がキュートだ。わたしたちを運んでくれるドラゴンは割と若いらしく、エスト専用らしい。

すごい、VIP待遇。エストの伴侶ということで、わたしも自由に使っていていいらしい。

伴侶じゃないんだけどね。

そこは便利だから、利用させて貰う。

「…………それは、駄目だ」

フェローシスターを背に乗せたドラゴンの鱗や、空からのレグナムを一望していると、

エストに絞り出すような声で拒否された。

本気じゃなかったけど、そんな深刻そうに言われたら気になる。

「なんで？」

「………………。守ると誓ったからだ。…………イノリはやはり、俺のことが嫌いなのか？」

押し黙ったかと思えば、捨てられている子犬のような様子で、わたしをじっと見つめてくるから性質が悪い。

金髪の長身なエストは、まるでゴールデンレトリバーみたい。

そつえばあの犬は、構って貰いたがり屋さんだったけ？

「嫌いじゃない、けど」

そう嫌いになれないから余計に困っているのだ。

>永遠の愛くだって已むを得ない事情だったといえ、そこまでエストを憎めない自分がある。

エストみたいな美形に求愛されて、嬉しくないわけがない。

それに見た目だけでなく性格も良いし、本当に文句のつけようがない。

でも。

「わたしは元の世界に帰るから、あんまりエストと関わり過ぎるのもよくないかと思って……」

物語でよくあるじゃないか。

異世界に飛ばされた女の子が、

その世界の住人を好きになって結局帰らない選択をするやつ。

それだけは、絶対に嫌。

そんなロマンチックな結末は、求めていないの！わたしは！

「そうだな……。早く帰れるといいな」

拳を震わせて無言の主張をするわたしに、エストは寂しそうに言う。

艶っぽいその声でそんな風に言われれば、物凄く後ろ髪引かれる思いがする。

自惚れてるわけじゃないけど、絶対エストはわたしに帰って欲しくないよね？

何が彼をそんな惹きつけてるんだろう。物珍しさかな？やっぱり。

「うん、そうだね。それに、エストだってすぐにわたしのこといなくなるよ」

物珍しいのだったって最初のうちだけだ。

わたしなんか誰にも必要とされてないと思う。

現にわたしの親だって、放任主義といえれば聞こえは良いけど、あんまり興味を持ってくれてなかったしね。

「イノリ……」

わたしなら、全然大丈夫。

一人でもそれなりに生きていける。

だから、そんな目でわたしを見ないで。エスト。

第15扉〜深紅の大蛇〜

バラチウム
宮殿に到着してすぐに、ウィルドの使い魔である白光の鳥が私を迎えに来てくれた。

私の肩に止まって、今朝エストにしていたように、吸いこまれるように私の中に消えていった。

途端に頭の中に浮かんでくるビジョン。

長い長い白い大理石で出来た階段を昇り、巨大な門を通過し、左手にある青い屋敷が、ウィルドに与えられたバラチウム宮殿内の居場所。

「は」

エストが私の手首を強く掴む感触で、現実に取り戻された。

ぱちり、と瞬きをして、アイスブルーの瞳と目を合わせる。

「……イノリは、まだ魔術に対する免疫がない。引き込まれないようにしろ」

「私、何か危ない状態だったの？」

寝起きみたいに、少しだけ頭が朦朧とする。

エストはこくりと頷いて、ゆっくりと掴んでいて手を離す。

「資質が高いと、魔術に敏感に反応してしまう、らしい。
お前の瞳が遠くを見過ぎていて、心配になった」

言われてみれば、今朝のエストはウィルドの使い魔を吸いこんでも、全然普通だった。
免疫の付け方なんて分からないけれど、私は神妙に頷く。これから気をつけよう。

「……送り届けていきたいが、任務がきてしまったようだ。すまない」

「え？」

地面からパアアアアアツと紅色の光が放たれる。

あまりの眩しさに目を腕で覆う。

光が収まった次の瞬間には、巨大な深紅の大蛇がとぐろを巻いていた。

「へ、蛇……」

ひゅっと息を鳴らして、私は後ずさる。

深紅の光り輝く鱗の身体は透け、つぶらな瞳は金色に輝いている。

さつき私が吸い込んだ白光の鳥と同じ波動を感じる。

それでもやっぱり爬虫類は怖くて、エストの袖を掴めば、彼は大丈夫だと平坦な声で答える。

「陛下の使い魔だ」

エストは私の手を振り払って、自分の腕を蛇の方へと伸ばした。

チロチロと細い舌を出して、とぐろを解き、ぬるぬると地面を這う。使い魔は思念体のようなもので、実際、地面に蛇行の跡がない。

エストの前で止まり、首をもたげて、差し出された腕に大きく口を開けてかぶりついた。

「エスト…！」

大丈夫だと分かっているけど、声をあげずにはられない。

どうしていちいちそんな残酷な真似をするのだろう。

蛇だから？それともレグナムで一番偉い陛下と呼ばれる方の使い魔だから？

腕を貫いたはずの牙は貫通することなく、エストの身体に吸い込まれていく。

痛みは感じないというが、エストはどこか苦しそうに眉をひそめている。

「……………はっ」

短い息が漏れる。

エストのその艶めかしい声に、身体が震えた。

エストは苦しんでいるのに、不謹慎だ。

私は己を恥じる。

「……………もう、大丈夫だ。あの方は、こういう趣味の方だ。気をつけておけ」

「うん、ごめんなさい。エスト」

「どうして謝る。謝る必要性が見当たらない。…俺の方が、謝るべきだ。不安にさせて、すまない」

「ううん、大丈夫。頑張つて慣れるから」

エストに欲情したかもなんて口が裂けても言えない。

これも刻印のせいだ。私は左胸の辺りを押さえながら、作り笑いを浮かべた。

「では、また夕方。ここで落ち合おう」

そう言つて、エストは私の頬に軽く口づけを落としていった。

「い、いつてらっしゃい」

ここではなんでもない別れの挨拶に、いちいち頬を染めてしまう自分が憎かった。

郷に入れば、郷に従えだ。

第16扉〜師匠と弟子〜

鮮やかな青い屋敷は、見た目こそ豪華だったけれど、中は地味だった。

地味というのは語弊があるかも知れない。

何もないのだ。

自動で開かれた扉をくぐり、

ぼつぼつと導くように灯っていくランプの光に照らされながら、薄暗い廊下を進んで行く。

ウィルドの屋敷に入る時、すれ違ったメイドさんに何やら気の毒そうな顔で見られた。

レグナムの人間は、たいてい私に会うとこの容姿に目を向けるのに、今回に限ってはそれとは関係なくただただ憐れまれた。

ウィルドの性格の悪さは御墨付きなのだろうか。

私は初対面の時のウィルドの口の悪さを思い出して、ははっと苦笑する。

完全に私を馬鹿にしている人間のもとに、お世話にならなければならぬというこの決まりの悪さ。

廊下の突き当たりの部屋の前で立ち止まる。

自分の不幸を嘆き、ノックして銀色のドアノブを回す。

「遅い。使い魔の知らせを識ったなら、5分で来なよ。」

陛下の使い魔に気を取られて遅刻とか笑えないね。

しかも、エストに欲情してるし？ 恥ずかしい子だね」

開口一番。

安楽椅子に偉そうにふんぞり返って腰掛けるウィルドに、嫌味を言われる。

しかも一言一句、さっきまでの私の様子をご丁寧に説明してくれている。

どこかで見ていたのだろうか。ああ、でも世界最強の魔術師らしいし普通のことなのかも。

でもだからってあんまりだ！！

「……私より年下の子にそんなこと言われたくないかも。プライバシーの侵害よ！」

びしつと人差し指でウィルドを指す。

エストに聞いたのだ。実はウィルドが私より2歳年下だって！

「ぶらいばしー？何それ。まあいいけど。

それと年齢は関係ないんじゃないかな？キミの社会的立場を考えてごらんよ。

僕は”銀色の魔術師”で、キミのお師匠様。弟子なら、僕からのどんな責め苦も耐え切って欲しいな」

輝かんばかりの笑みを浮かべて、ウィルドが可愛く小首を傾げる。

ああ美少年だから絵になるなあ ……って違う！

サディステックか！DSか！

私はいじめられて喜ぶ趣味なんてないんだから！！

「それは遠慮します。私、自分より年下の子のわがままなお願いで聞けないんですよね。」

あなたが、いくら私の、尊敬する、お師匠様だとしても、やっぱり無理なものは無理だから」

「あはは。それが人にものを教えて貰う態度？生意気だねえ。素性の知れないどこの馬の骨かも分からない女のくせに」

「ふふふ？素性なら分かってるじゃないですか。

私、異界人ですよ？ウィルドったらそんなことも忘れちゃったんですか？

あなたが一番最初にそう言っていましたよね」

「あははは。ほんつと生意気な女だねえ。師匠のこと呼び捨てしちゃうんだから。

みっちりしごいてあげるから覚悟しといてよ」

「ふふふふ。やだな、勘弁してくださいよー。

エストに頼まれなきゃ、こんな所絶対に来なかったのに」

「あははははははは」

「ふふふふふふふ」

互いに笑いつているが、目は笑っていない。

せつかく綺麗な顔してるんだから、それらしく振舞ってればいいのよ。

いくらこの世界で生き抜いて、元の世界に何の後腐れもなく帰るためとは言え、

大人しくウィルドの言うことに従ってなんていられないんだから！

第17話 弟子1日目にして死ねと？

そんな私の決意とは裏腹に、ウィルドは思ったよりも全然優秀な師匠だった。

確かに性格と口は悪さは最悪だけど、人を惹き付ける魅力があったし、説明も分かりやすかった。

「　　って、ことだよ。分かった、馬鹿弟子？」

絹のような銀色の髪をさらりと揺らして、私の目を覗き込んでくる瞬間が好きだった。

「はい、大体分かりました。ウィルド先生？」

いちいち嫌味を付け加えないと気が済まない、凶悪で綺麗なお師匠様でもね。

「じゃ、早速試そうか。>混沌の言葉<を唱えるだけなら、覚えればいいだけだし、

魔力さえあれば誰でも使えるからね。自分だけの形を見つけなきゃ意味無い。

その為にも、手っ取り早く極限状態まで自分を追い詰めなきゃ面白くないしね。

” Create ” , ” Expand ” , ” Trial ”

ぼんぼんと英単語　　>混沌の言葉<を唱えて上げていくウィルド。

彼の掲げた手に魔力の風が纏わりつき、箱庭が創り出される。

呪文を覚えるのは自己学習しなさいってことで、
無駄を好まないウィルドは私に効率よく魔術を会得するために、
自分だけの魔術の形を会得させてくれるということだった。
その為には、ギリギリの限界状態じゃないとダメらしい。
普通に修業をしてたのでは10年単位で時間がかかるらしい。
何事にも全力を投じるのが彼のスタンスらしいが、
それはあくまで効率よくいかに楽な人生を送るかってことが前提み
たいなわけで。

つまり、ウィルドは私にほとんど死ねと言いたいわけですよ。

うん、弟子1日目にしてまさかの待遇。

どうせならまだ弟子らしく雑用とかの方が良かったかもな、と現実
逃避し始めた頭で考える。

「さ、馬鹿弟子。この中に、飛び込んで？」

わーお。

すっごいいい笑顔で差し出される箱庭。

でもそのファンシーな見た目に反して、物凄く物騒なものだからね。
顔が引き攣る。

恐る恐る手を伸ばして、箱庭で触れようとすれば、

「さっさと行け、クズ」

箱庭をぐいって手のひらに押し付けられて、

「ついで、ウィルドのばかああああああああああ」

叫び声と共に吸い込まれた。

第18扉 極限状態？それよりも鬱です

「じ、ここは……」

浮遊感に吐きそうになりながら、喉を押さえつつ目を開ければ、元の世界と全く同じ風景だった。

それも異世界に来た衝撃で大分印象の薄れてしまっていた、私の通っていた高校だ。

私の隣をセーラー服や学ランを着た同級生が通り過ぎて行く。

「りっちゃん、どうしてここに、っ！」

高校で一番仲の良かった友達の肩に触ろうとして、手がすり抜けた。驚いて手を引つ込めるが、りっちゃんは何事もなかったかのように前だけを見て通り過ぎて行く。

他のみんなも一緒。私の存在が無視されている。

「……っ、あ、そう、そうだった。ここは、ウィルドの箱庭だもん。元の世界じゃない。それに、卒業したじゃない。私」

自分に言い聞かせてる。

精巧に作られて偽物の世界。

元の世界を箱庭にするなんて、悪趣味だ。

「元の世界で、どうやって極限状態になるのかな？」

無視されるのは辛いけれど、死ぬような極限状態になるとは到底思えなかった。

とりあえず高校の自分のクラスの中に入って行き、誰にも知覚され

ることなく、自分の席に座った。

人には触れられないけれど、物には触れられるのだ。

クラスメイトたちが動いて、喋っている様子を、まるで映画のワンシーンのように見つめる。

やがてチャイムが鳴って、担任の先生が入って来て、授業が始まる。

ああ、今日は火曜日なんだ

以前受けた覚えのある授業を懐かしく思いながら、見つめる。

私の席には、私はいない。

いるけど、いない。

箱庭の私はどこにいるんだろう。

『そこは私の居場所よ!』

ぼんやりと授業を聞いている私に、話しかける声があった。

ハツとして声の方を見れば、案の定そこには『私』がいた。
箱庭の私。

彼女には、私が見えているらしい。

『あなたの場所なんて、どこにもないの!どきなさいよ!』

そう言っつて、私は『私』にどんと突き飛ばされた。

「な、何するの?!」

椅子から落とされて、『私』を見上げれば、

いつの間にかクラスメイトたちも彼女と一緒に私を見下ろし

ていた。

私の存在になんて見向きもしない両親までもが、輪になって私を取り囲んでいる。

『どいて、どいて！ここは、私の場所なの。あなたの場所じゃないわ！』

あなたなんて誰にも必要とされてないの！』

「いきなり意味分かんないんだけど！頭おかしいんじゃない！」

『お父さんとお母さんもあなたなんていらないうって。私がいればいって』

「はあ？」

『りっちゃんもあなたのこと嫌いだって。何考えてるのか分かんないって』

「ちょっと、何それ」

『瀬戸君だって、あなたより私のことが好きなのよ。ううん、あなたよりも、私よりも、』

倉橋さんのことが好きなんだって。悲しいね』

瀬戸君。短い間だったけど、付き合っていた私の彼氏。

『私』の言うように、私と別れてすぐに倉橋麗華っていう学年一の才女と付き合い始めたのだ。

そして、りっちゃんのこと。

思い当たる節がないわけじゃない。

コンプレックスの塊のようになりっちゃんが、私のことを時々厭っているなと思う時はあった。
でも、私たちは仲が良かった。

両親だって、私のこといらなくなんかない。
ただ忙しいだけで、私に構ってる暇がないだけなんだ。

『あなた、誰にも必要とされてないんだし、死んだ方がいいんじゃないの？』

まるで舞台の照明のように、私と『私』の周り以外の光が一切消えた。

『私』は虫けらでも見るような目で、私を見ながら憐れむように言った。

第19話 さよなら、私

私は死んだ方がいいのか
：考えなかったことがないわけではない。
はない。

死ぬ、とまではいかないけれど、
誰の目も届かないところでひっそりとしていたほうがいいのではな
いか。

私の存在なんて誰にとっても必要ない。
いても、いなくても変わらない。
むしろいないほうがいい。

『私』に指摘されたことは、私が物心ついたところからずっと感じて
いたことだった。

ああ、だからそのための極限状態かと笑う。

これは、人の心の闇を映す箱庭なのだ。
他人にとっては他愛もないこと、取るに足らないこと。
でも、自分自身にとって目を背けていたいこと。

やっぱり、ウィルドはなかなか悪趣味なことをしてくれる。

『ねえ、死にたくないなら、『私』と代わって？
あなたの身体の主導権を、『私』にちょうだい？』

教室の床からめりっという音を立てて、茨が生えて、私の四肢を拘
束する。

呆気にとられている間に、『私』が私を押し倒して、その上に馬乗
りになる。

彼女の手には、大きなガラスの破片が握られていた。

精神の死は、肉体の死にも繋がる何かで聞いた覚えがあるけれど、この場合、私は『私』に乗っ取られるのだろうかとぼんやり考える。肌に食い込む棘のせいで、痛みに顔をしかめる。私は抵抗せずに、『私』のされるままだった。

ただ、やっぱり悪趣味だなと口元で笑みを作るだけで。

『抵抗しないんだ。『私』にくれるの？』

『私』は面白そうに私を見る。彼女も、同じように私と笑っていた。

それがなんだか可笑しくて、私は肯定も否定もせずにとただただ笑っていた。

「あなただって、誰にも必要とされてないんじゃないの？」

『いいえ、『私』は必要とされるわ。これから、絶対に。何も分かってないあなたとは違うもの』

親切心で教えてあげたのに、むしろ『私』に自信満々に否定された。この女は何を言っているのだろう。やっぱり、ウィルドの作った箱庭だもの。

性格が歪んでるんじゃないの？

『さようなら』

私』

『私』の冷たい声と、ガラスが振り下ろされる音がして、
私は何もかも投げ出そうと、闇に身を委ねようと、目を閉じた。
なのに。

【これから、イノリのごとは、俺が守ると誓う】

彼の言葉が、私を繋ぎ止める。

第20扉〜黒龍と心の一部〜

*

胸に刻まれた複雑な深紅の紋様>永遠の愛くから、熱を持った光が溢れ出す。

『イノリ』はあまりの眩しさに反射的に目を閉じ、その拍子に手元が狂う。

「え…すと……」

イノリが呟いた無意識の言葉に呼応するかのように、光は輝きを増し、確かな質量を持って『イノリ』を弾き飛ばした。

『…か…は…っ』

教室の壁に背中から打ちつけられた。

床に這いつくばる形になった『イノリ』を、

イノリを拘束している茨とは別のものが床から生えて、

『イノリ』の腰に巻きついて『彼女』を起きあがらせる。

『あと少しだったのに…!!エルネスト・ヴィ・ナイトロード…!!』

『彼女』に取って忌々しい>永遠の愛くを睨みつけながら、叫んだ。刻印から感じる想い。

アイスブルーの瞳を、『彼女』は 視て いた。

刻印から発せられた質量を持った光のせいかな、

イノリを拘束していた茨は焼き払われていた。
代わりに、イノリの身体を守護するように、

黒曜石の輝きを放つ鱗に、瞳孔が細目た青い瞳の龍がいた。

イノリだけの形。

ウィルドでいう白い鳥、

陛下でいう深紅の大蛇。

それが、イノリの黒龍だった。

『ああ、もう少しで『私』は私になれたのに……。忌々しい、忌々しいわ、>永遠の刻印<。』

やっと私が表に出られると思ったのに『』

つまり、黒龍の出現は『イノリ』の敗北、イノリの箱庭での修行の成功を意味していた。

砂時計から零れ落ちて行く砂のように、教室が、『イノリ』がどんどん崩れ落ちて行く。

『でも、簡単に消えてなんてあげない。許さない、エルネスト・ヴィ・ナイトロード。』

お前たちの思い通りになんかさせない。>永遠の愛<なんて笑わせ
てくれるわ。

イノリは、『私』。イノリの心の一部は、『私』が貰っていく『』

『イノリ』はそう言って、ガラスを持っていない方の手のひらを開いた。

そこには淡い光があり、深紅に輝いていた。

『私』は、ただで消えてあげないんだから』

そうニッコリ微笑んで、『イノリ』は崩れ去った。

第21扉〜白紙になった日〜

「これは馬鹿弟子の試練だったっていうのに、関与するなんて感心しないなあエルネスト」

箱庭から吐き出されたイノリを抱き止めたエストに、美しく整った顔に青筋を立てるウィルド。まるで愛おしそうにイノリをその腕に抱く目の前の男に、ウィルドは吐き気がしそだった。

突然自分の部屋に乱入して来たかと思えば、黒い光で点滅する箱庭 敗北を示す証 を見て、エストは血相を変えて駆け寄り、箱庭の中のイノリに向かって呼び掛けたのだ。

彼女を、守ると。

「砂吐きそだよ。一方的な愛の証のはずだよ、本気になってないよね？こんな女に」

「……………」

「沈黙は肯定と取るよ。自分で自分の首を絞めるような真似はやめておいたほうがいいよ。」

キミは駒なんだ。余計な感情移入はやめた方がいいって、前にも言っただよ。

キミはどうせこの女を裏切るんだ。どっちも傷つくだけだよ」

「……………ウィルドは優しいな。忠告してくれるのか」

「はあ？能天気なこと言ってるって呪いかけるよ。
僕は面倒を増やしたくないだけだから」

「……………そうか」

「その生温い笑みを浮かべるのやめてくれるかな、気色悪いから。
けど、まあ……………キミが横槍を入れたことで、試練には打ち勝ったけど、代償を取られたみたいだね」

「……………代償？」

イノリだけの形　　黒龍は　　、彼女の腕に刺青として刻まれている。

黒龍の青い瞳がエルネストの瞳の色と似ていることに気づいて、
ウィルドは胸焼けしそうだった。
でも、それだけに奪われた代償は高くついている。

「心の一部を奪われてる。
僕にとってはどうでもいいけど、キミにとってはそうじゃないかも
知れない。」

そして、馬鹿弟子にとっては……………どっちだったんだろうね」

「戻らないのか？」

「喪ったものは、二度と戻らない」

「そう、か……………」

エストは俯いて、イノリの白い肌に触れる。

彼女がくすぐったそうに瞼を震わせると、エストはそつと手を引いた。

「それでも、俺は俺の信念を貫く」

「ふうん。キミの信念とやらはどうでもいいけど …… 馬鹿弟子は借りるよ」

ウィルドは大して興味なさそうに相槌を打って、指をぱちんと鳴らした。
イノリの身体がエストの腕の中から滑り出て、ウィルドの目の前にある椅子に腰かけられる。

「キミは陛下の犬らしくしてるといいよ、エルネスト。
こんな女の子とは忘れて、ね」

いい笑顔で、エストに微笑みかける。

「な、ウィル ……」

その笑顔に、邪悪なものを感じたエストが行動を起こそうとするその前に、

「Forget」

ウィルドは短く呪文を唱え、

一つの絆を白紙にした。

「全ては、陛下のために、か」

事切れた人形のようにその場に崩れ落ちるエストを感情のこもらない瞳で見つめ、
ウィルドは自嘲気味に呟くのだった。

第22扉〜インキュバスのパディスト〜

目が覚めると、知らない女の子が私を覗き込んでいた。

「目が覚めたみたいよ！銀色の魔術師！」

淡い水色のツインテールを揺らして、
フリルをふんだんにあしらったドレスを着た女の子は、
ぴよんぴよんと嬉しそうに跳ねる。

エストのベッドよりも更に数段柔らかいベッドから身体を起こせば、
ソファで優雅に紅茶を飲んでいるウィルドと目が合った。

…というより、この部屋はどこだろう？

ウィルドの部屋ではないし、エストの部屋でもない。

全体を白と金を基調とした部屋は、
テレビで見たことのある超高級ホテルのスイート見たいだった。

「情眠を貪るなんて良い御身分だね、馬鹿弟子」

紅茶のカップをソーサーに置いて、ウィルドはそのままにっこり微笑んだ。

ああ、黙っていれば綺麗なお人形さんで目の保養になるのに。

私は小さく溜め息を吐いて、すいませんねえと答えた。

それよりも試験は … 上手くいった、のだろう。

腕にある見覚えのない龍の刺青に、私は更に溜め息を重ねた。
こんな一目で分かる大きな刺青、元の世界に帰ったらすごい人目を惹くだろうなあ。

ていうか銭湯とか行ったら刺青お断りなのに！
また後腐れなく帰るっていう目標が、一つ邪魔されたような気がする。

「ところで、その女の子は誰なんですか？まさかウィルドの隠し子とか？似てないけど」

淡い水色のツインテールに、くりっとした大きな琥珀色の瞳。
女の子にしてはちょっと大きめの身長だけど、とっても可愛らしい。

「馬鹿なの、キミは。これは 男だよ」

「……はい？」

「だから、男だよ。こんな見た目だけだね」

言って、ウィルドは自分のそばにその女の子(?)を引き寄せると、不躰にもドレスの裾をめぐりあげた。

「~~~~~?!!」

秘密の花園には、女の子にはあってはならない立派なモノが……!!
!!

私は悲鳴を上げそうになる口を自分で塞いで、目を白黒させながら、
わなわな震えて男の子(?)を見つめた。

てゆーか、男の娘？！

「…ほら、この馬鹿弟子に自己紹介してあげて」

「バディは、バディスト！よろしくね、おねーちゃん！」

ずきゅん！

は、ハートを射抜かれる音が聞こえました。

可愛い！可愛過ぎる！

「私は、天野祈！イノリでいいわ！可愛い！可愛い過ぎよ、バディスト君！！」

「イノリおねーちゃん…！バディは、バディでいいよ！イノリおねーちゃん好き好きー！」

ずきゅずきゅん！

更にハートを射抜かれる音が。

ああもうダメだ。この可愛さは犯罪。

元の世界でオタクどもが男の娘にメロメロになってたのも納得。

「馬鹿弟子…教えておいてあげるけど、バディストはそれが本来の姿じゃないから」

そんな私のメロメロの姿に、ウィルドが呆れたように言う。

「え？」

「バディストは魔族だよ。 インキュバスって知ってる？」

「え」

思わず、腕の中にいるバディを見る。

するとバディははにかんだような笑顔を浮かべ、
次の瞬間にはエストの変わらぬ美丈夫へと変わっていた。

「 お前を食べたい、イノリ」

腰が砕けるような甘い低音ヴォイス。

くるくるとした水色のツインテールは跡方もなく消え去り、
元の世界で流行っていたようなパーマの短髪になり、
くりっとした大きな琥珀色の瞳は、瞳の色はそのまま、
切れ長の瞳に。

腕の中に抱きしめていたはずのバディに、
逆に抱きかかえられているという構図に。

いやいやいやいや！

おかしい、おかしいから！！

「こ、こんなの認めない！！え、” Enhancement ”」

ぱあっと右手が光り、そのまま握りこぶしを作って、
迫って来るバディの顔を殴り飛ばした。

第23扉 エストに捨てられました

レグナムに魔族が現れるのはそう高い頻度のことではないらしい。ただレグナムと敵対している国の幾つかが、この神聖王国レグナムを陥落させようと、魔族を送りこんできたりするらしい。

しかし、この男の娘なインキュバス・バディストは、ウィルドの話によると、

どうも私の精気に惹かれてやって来たらしい。

魔族なのだから被ってくれてもいいのに、

どうやらバディは普段の見た目は男の娘だし、

魔力があまりないようで本来の姿が維持出来ないようだし、私だけを獲物にしているようなので、

まあいいかと思って、

押し付けることにしたらしい。

「いやいやいやいや！おかしいでしょ！

私が寝てる間に、なんか突拍子もないこと起き過ぎでしょ！」

「五月蠅い、馬鹿弟子。」 Silent」

混乱して突っ込む私を、心底うざそうに、ウィルドは魔術で黙らせた。

「でも、キミはバディストを突き放せないと思うよ」

私が強化の魔術によって力いっぱい殴り飛ばした結果、

男の娘の姿にバディは、私に縋るようにくっついていて、本来の姿が美形だと分かっているにも、この可愛らしい姿を拒絶するなんて出来ない！
なんて恐ろしいんだろう、インキュバス！

でも、ウィルドはそういう意味では言っていないみたいで、喋れなくされた私がどうして？と首を傾げれば、彼は憐れむような目をする。

「 エルネストは、キミを捨てたよ」

「……」

「だから、キミの身柄は、王国預かりになったんだ。寂しいでしょ。キミを愛してくれているような男がいなくなったんだから」

酷い人ね、本当に。

でも、最初から、エストに申し訳ないとは思っていても、それ以上の感情なんて抱いてなかったから平気。

「重荷がなくなつて、すつきりしましたけど？逆に。むしろ、バディの方が今度は私にとって問題かも」

「 そう、ならよかつたね。」

エルネストはもう、キミなんかのこともう何も知らないだろうからね。

今度はキミの精気を餌にでもして、せいぜいバディストを利用してやるといいよ」

「……………<永遠の愛>だけを押しつけて、トンズラですか。私の元の世界なら、後ろから刺されてもおかしくないレベルですよ、エストは」

「ハハツ、そうかもねえ」

私の言葉に、銀の瞳が意味ありげに細められる。

なんだかおかしな気分だ。

本来の私なら、

こんな捨て方されたらもつと落ち込みそうなものなのに、なんにも感じないなんて。

優しかったエスト。

それも幻想だったのだろう。

ただ一方的なく永遠の愛>という重荷だけが残された。

「バラチウム宮殿でエストを見かけても、責めないであげてよ。

アイツ、キミを見てももう何も反応しないだろうけど」

「…好都合ですよ、後腐れが一つ減りました。私はさっさと、この<永遠の愛>を、

ウィルドから魔術を習って解く方法を探すだけです」

「…良い心がけだね、馬鹿弟子」

「今度は、バディがおねーちゃんのそばにいるから寂しくないね！」

「餌として、でしょ」

「えへっ」

自分に縋りついてくる愛くるしい存在を、私はぎゅっと抱き締めた。

エストからの仕打ちに、何も痛まない心が、ただただ不可解だった。

第24扉 女王陛下

神聖王国レグナム の”王国預かり”となった異世界人として、

私はウィルドに連れられてこの国の女王陛下に謁見することになった。

昼間だというのに謁見の間は夜のように薄暗く、

魔術の光によって灯された硝子の球体がランプ代わりにふわふわ浮遊し、

幾何学的な不思議な模様がデザインされている大理石の床を照らしていた。

謁見の間にある小さな階段の上にある、豪華なヴィロードで出来た赤い長椅子に、

女王陛下は優雅に寝そべっていた。

「わらわの名は、アイリツシュ・クイーン。

おぬしが珍妙な異世界からの人間か」

燃え盛る深紅の髪と瞳の持ち主で、黒いドレスを好む絶世の美女。

”血塗れの女王”として国内外から恐れられているらしい。

人前だというのに惜しげもなくドレスの裾から晒される太もも。

この部屋に焚かれた香の匂いと合わさって、なんだか妙な気分になる。

「天野祈です。…お世話になります、女王陛下」

ウィルドに倣って片膝をついて頭を垂れている私は、

僅かに顔を上げて名前を告げた。

女王陛下と目が合うと、彼女は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに艶やかに微笑んだ。

この国の人間は、私の顔を見るといつも一瞬驚いたような顔をする。東洋人の顔ってというのはやっぱり珍しいのだろうか。

「ほっほ。イノリは綺麗な瞳をしておるな」

豊満な胸元から漆黒の扇を抜き取り、女王陛下はその矛先を私に向けた。

紅の光が扇から発せられ、見たことのある深紅の蛇がそこに巻きついていた。

パラチウム宮殿に来て最初に出会った蛇　　といってもあの時よりは小ぶりだが。

確かエストが陛下の使い魔と言っていたけれど、女王陛下の使い魔だったのか。

淡い光に照らされて、深紅の鱗が妖しく輝いている。

ぼとりと嫌な音を立てて扇から落下し、にゆるにゆると大理石の床を這い、私の片膝に巻きついて上ってきた。

き、気持ち悪い…！！

ぶるぶると足を震わせながら、嫌悪感に耐える。

「わらわとおそろいじゃ」

深紅の蛇が、ちゆるちゆると二股に分かれた舌を震わせて、私の左目を舐めあげた。

「あ………」

女王陛下の顔を見上げれば、

彼女の燃え盛る紅蓮の瞳が、

一瞬金色に煌めいた。

この世界に来て変わってしまった私の左目と同じ金色。

「ほっほ。次の謁見まで、御身を大切にの」

女王陛下が扇を一振りすると、深紅の蛇が消えた。

「……行くよ、馬鹿弟子。御前を失礼します、女王陛下」

「うむ。息災でな、ルークよ」

「……はい」

呆けたように動けなくなった私を、ウィルドは無理やり立ち上げらせて、

謁見の間の外へと連れて行く。

華奢な見た目に反して、意外に力の強いウィルドに感心しつつ、もう一度女王陛下のことが気になって振り向けば、

彼女の長椅子の傍にさつきはいなかった黒い影があった。

「女王、陛下」

腰に来るような艶めかしい低い声。

波打つような金色の髪に、アイアスブルーの瞳。

間違えたりはしない。

エスト　　！！

振り返ったまま引き返そうとした私の身体を、ウィルドが強く掴んで引き止めた。

「…………馬鹿弟子。キミの知るエルネストはじゃない。あれは、神聖王国レグナムの陛下の”騎士”。キミなんか関わっていい存在じゃないんだよ」

「どうして…？でも、あれは、エストじゃない。私に、永遠の愛くだなんて誓って、それで…………っ！」

「エルネストに恨みごとを言うだけなら無駄だよ。女王陛下の機嫌を損ねる前に、出るよ」

「…………はい」

私は渋々頷いて、ウィルドに引つ張られながら謁見の間を出た。

恨みごとくらい言ってもいいじゃない！

恨みごと、くらい……。。

言いたいことは、それだけだったはず……。？

第25扉 空中庭園にて

> 混沌のことばくが書き記された魔術書
英語の辞書を、 私にとってはただの

膝の上に広げて、ぼんやりと微睡んでいた。

凶悪なお師匠様であるウィルドに連日しごかれていているせいで、
寝ても寝足りなくて、全然疲れが取れない。

スパルタのおかげで魔術の腕はそれなりには上がったと思う。

使い魔の黒龍も自由自在に操れるようになったおかげで、

フェローシスターに乗らずに、黒龍に乗って街に下りたりもしている。

あっちこっちに行動範囲が広がった私の一番のお気に入り場所は、
宮殿バラチウムの更上空に浮かぶ空中庭園カッスス・ホータス。

見たことのない植物や小さな生き物、果ては絵本に出てきそうなフ
アンシーな妖精。

彼らがのびのびと楽しそうに過ごしている姿を見ると、
私まで癒された。

肩に寄りかかって眠っているバディ（少年の姿）の眠気に誘われて
いると、

ふと目の前に金色の一角獣ユニコーンがこちらに近づいてきているのが見えた。

「……ん、ユニ。おいで？」

この無垢で美しい獣は、私が安直に名付けた名前に、

気分を害する様子もなく、嬉しそうに鳴いて、懐いてくれている。

今だって、鼻面を私の頬に寄せてくれている。

「おや、先客がいらしたのですね」

「……っ!」

全く気配を感じさせず、熱帯系の植物の後ろから、人が現れた。驚いて身体を震わせると、その振動でバディが目を覚ました。ぱちりとその大粒の琥珀の目が瞬き、すぐに剣呑そうに細められる。

「ぎ、”銀色の魔術師”が弟子の天野祈と申します!」

バラチウム 宮殿にいる人間なのだから、

高貴な身分に違いないと思って、丁寧な言葉と態度を心がけて、以前ウィルドに教えられた身分の名乗り方をする。

ウィルドの居住する区画に住む私は、ほとんどバラチウム宮殿の人間を見たことない。

ウィルドは身の回りのことは全部魔術でやってしまっし、時々彼を訪ねて来る依頼人も、私はフードを目深くかぶって対応したり、部屋から出るなど言われてたりするので、こうやって直接会うことは滅多になかった。

「此処は、美しい庭園でしょう。でも、貴女のような人に鑑賞してもらってこそ価値があるというものです」

その人は、流し目をこちらに送って来て、微かに微笑んだ。

レグナムの人間は美形ばかりかと、思わず溜め息を吐きたくなるような美人だった。

中性的な顔立ちだが、恐らく男の人だと思う。
太陽の光を反射して光り輝く髪は、私が瞬きをするたびに七色に変化する。

蜂蜜を溶かしたような甘い金色の瞳が、優しげに私を見つめた。

私と、”同じ”だ。

瞳の色しか共通点がないのに、私はただ漠然とそう思った。

「バディは、きれい」

青年には聞き取れないような小さな声で、

バディはそう言っつて私の腕に強くしがみついた。

剣呑な光を宿した琥珀色の瞳は、まるで睨むように青年を見ている。
インキュバスなんだから、男には関心がないと思っつていたけれど、
こつもあからさまに敵意を向けるなんて珍しいなと思つた。

「その小さな子には嫌われてしまつていようですね、悲しいこと
です。」

…ワタシの名は、レギスと言います。

初対面の人間がこんなことを言っつなんて馴れ馴れしいと思われるか
も知れませんが、

どうか時々ワタシと此処で会つてお話ししてただけませんか？」

青年　レギスは、バディの態度に苦笑しつっつ、

私にそうお願いしてきた。

「恥ずかしい話なのですが、ワタシには話し相手というものがいな
いのです。」

宮殿から外へは一步も踏み出すことが許されていません」

一角獣^{ユニコーン}が私から離れて、
悲しげに目を伏せるレギスにすり寄って行き、
金色の身体が半透明になって吸い込まれてしまった。

「……！ユニは、あなたの使い魔だったんですか…？」

レギスの纏う魔力と、一角獣^{ユニコーン}の魔力の気配が同じだと、今気づいた。
だから彼が現れたことにも気づけなかったのだと、納得する。
それにしても初見で見破れなかったなんて、
ウィルドにでも知られたらまた馬鹿にされそうだ。

「はい。一角獣^{ユニコーン}を通して、貴女を見ていました。
こんなワタシ、軽蔑されますか？」

レギスの髪が深い蒼に変わって、しゅんとしな垂れる。

「軽蔑なんてしませんよ！少しはビックリしちゃいましたけど、
こんな私でよければ話し相手になりますよ。
レギスみたいな美人さんと知り合いになれるなんて、大歓迎です」

私は手を差し出す。

反対側の腕で、バディが何か言いたげに服の袖を引っ張っているが
無視する。

……本当、バディは男が嫌いなんだから。

「ふふ、それはよかった。

これからよろしくお願いしますね、イノリ」

「ええ、こちらこそ」

レギスが私の手を取って、甲に口づけを落とした。

……握手のつもりだったんだけどな!!

第26扉〜拒絶〜

ウィルドとの修行が終わって、
肩を揉みながら歩いてみると、
廊下の角から見覚えのある人物が現れた。

「エスト！」

ほの暗い廊下を照らすランプの光を受けて輝く金髪を揺らし、
名前を呼ぶ声に反応して、エストが顔を上げた。
前へと踏み出した足が躊躇し、はつきりと目が合う。
エストは僅かにアイスブルーの瞳を揺らして、私から目を逸らした。

「…私のこと知らないなら、どうして刻印なんて刻んだの？」

守ると誓ってくれたエストは、幻想だったのだろうか。

次に顔を合わせたら恨み事を言うつもりだったのに、
私は泣きそうになって、まるで縋りついてるみたい。

「…？魔力の気配が…」

不意に気づいた馴染みのある魔力の気配に、
エストの頭へと手を伸ばしかけて …。

「俺に、触るな」

冷たい声と共に、容赦なく手を振り払われた。

「……っ！勝手よ……！」

振り払われた手が赤くなり、私は感情的になって叫んだ。

ひどい、ひどい、ひどい！

勝手に、永遠の愛を誓っておきながら、

図々しく私を絶対を守るって言って、

ずかずかと人の心に踏み込んできて！

短い期間で絆されるつもりなんて全然無かったけど、それでもこれは酷いと思う！

私は、激情に同調するように身体の内部で膨大する魔力を、

>混沌のことばくで形で縛らずに、感情のままに酷い男にぶつける。

「……縛る足枷が、一つ減った。己の立場を弁える」

エストは感情の籠らない声で、短く言う。

私の魔力のせいで、頬が切れて血が出たっていうのに、顔色一つ変えない。

そして黒衣のマントを翻して、空間に溶けるように消えた。

「元の世界の人たちと同じじゃない……」

その場に崩れるように座り込んだ。

『箱庭』で『私』が言ったように、誰も私のことなんて必要としない。

そう改めて実感させられた。

第27扉 絶望を快楽に

「騎士”の特権の乱用だな」

足音も立てずにバディストが背後に立っただけ、いつから見ていたのか、どこか呆れたようにエストが消えた虚空を見る。

私のことを一瞥して、切れ長の琥珀色の瞳を細めた。

「絶望しているのか、イノリ」

青年の姿に変身したバディは、敏感に私の感情を読み取る。魔族にとって負の感情は食事になる。

「……ねえ、騎士の特権で？」

バディの問いかけには答えず、私は疑問に思ったことを尋ねた。エストは特別な騎士だと聞いていたけれど、あまり深く追及したことがなかった。

王直属の騎士、それしか知らない。

「お前も目にしたとは思いますが、”騎士”は空間を自由自在に渡ることが出来る。」

他の特別な役職の人間にも、それぞれ特別な力を持っている」

「へえ…そう、なんだ…」

自分で聞いておきながら、随分と気のない返事をしてしまう。

”騎士”の特権なんかよりも、エストに手を振り払われたことが頭を占める。

日を追うごとに、刻印が疼いて、エストのことで頭が一杯になる。まるで恋をしているみたいに。

これが>永遠の愛<の弊害の一つだとしたら笑えない。

そしてウィルドが言っていたように、バディストを突き放せなかった私は、彼の求めるままに精気を与えてしまっている。

エストという穴を埋めるように、バディを求めてしまう。

一線は超えていないけれども、その結果として、バディが力をつけていき、

幼女姿から、少年姿、そして青年姿となってしまうている。

恋だの愛だの、そんなキラキラと輝く素敵なものではなく、刻印によって本能が強制されるのだ。

なんて厄介な呪いだろう。

「行くぞ、イノリ」

動かない私に、痺れを切らしたようにバディが促す。

バディがしゃがんで、私の目線に合わせ、魅惑的な笑みを浮かべる。

「オレはお前から離れたりはしない」

手を重ねられ、愛撫するように撫でられる。

「餌だからでしょ…」

「ふっ、それはそうかも知れない。だが、オレは嘘を吐かない。インキュバスで、魔族だから」

美しい顔が近づいてきて、赤い舌で目尻を舐められた。私、泣いてた？

「絶望もいいが、オレは快樂が食べたい。」

「イノリもそちらの方がしあわせだろう？」

バディストの背中から黒い羽が生える。

琥珀色の瞳が、魔族の力の行使に影響されて血色に変わる。

女王陛下の瞳の色は燃え盛るような深紅だったが、それとは違う禍々しいまでの赤。

バディの羽に包まれると、魔力の気配がさらに高まり、視界がぐにやぐにやと歪み始めた。

自分の身体が空間に合わせてねじ曲がり、頭がガンガン痛み始める。魔族の使う転移は乱暴で、慣れない。

私はいつも乗り物酔いみたいな状態になる。

「ベッドへ行こう。快樂に耽り、嫌なことは忘れてしまえ」

悪魔みたいに、囁いた。

第28扉〜現場を押さえられる〜

寝苦しさを目を覚ました。

完全に成長し、溢れんばかりのフェロモンを放出して眠るバディストに、
がっちりと抱え込まれ、足も絡められていた。

「Leave me”!!」

バディの剥き出しの肩に手を置いて、呪文を唱えた。
ぶるりと空気が震えて、風圧でバディの身体だけが吹っ飛んだ。

「おいおい…随分な朝の挨拶だな…イノリ…」

壁に打ち付けられる直前に、羽を出して宙で停止したバディ。
ギリシャの彫刻のように美しい裸体を隠さず、優雅に床に着地する。

「服くらい着てよ!!あと、幼女の姿に戻って!!」

下半身くらいは隠して欲しくて、手元にあった大きなクッションを
投げつけた。

バディはそれを難なく片手でキャッチして、溜め息を吐きながら前
を隠す。

一応、パンツは履いてくれているのだけれど、Tバック。

この世界の下着レベルは、私の世界と一緒らしいけど、
流石は淫魔というか下着も厭らしい。

「……何故だ?この姿が本来のオレなのに、どうしてあえて変身し

なければならぬ」

「黙ってよ、歩くわいせつ物　　！！いいから、幼女になって！
じゃないと、今日はウィルドが　　…」

「僕が、何？」

「へ？」

出来れば朝から、しかもこの状況で聞きたくない声が聞こえてきた。
いや、これは幻聴。うん、そうだ。きつとそうに違いない。

バディが面白そうに口角を上げていたり、
扉からドSなオーラがしたりするのなんて気のせい！

「朝遅いから僕が直々に呼びに来てあげたっていうのに、へえ。そ
う。」

やっぱりそういうことだったんだ。
昨夜はお楽しみってわけだったんだね」

「うい、ウィルド　　！違う、誤解！やってはいませんから！
ね、そうよね？バディ？！」

紛うことなき本物のウィルドが、人形のように整った綺麗な顔で、
邪悪な笑みを浮かべている。
彼の肩にとまった使い魔の白い鳥にまで、軽蔑の目で見られている
ような気がする！！

私は慌ててバディに意見を求めると、バディは気だるそうにシャツ
を羽織っているところだった。

「ああ。イノリは処女だ。なぜなら、イノリは素ま …」

「Shut up!!!」

「…っ!」

余計なことを喋ろうとしたバディの口を、魔術で封じる。

今、何を言おうとした？

そして、なんで私が処女とかバラすの！

「……エルネストさえなきや、僕はいいと思うけどなあ。

そうか、イノリはバディストと素ま …」

「ウィルド!!」

私は大きな声で名前を呼んで、ウィルドの発言を掻き消した。
可愛い顔して、あなたまで何言おうとしてるんですか!!

「それで、何の用なんですか！ウィルド先生！

わざわざ起こしに来てくれたくらいなんですから、何か用事があったんでしょっ?!!」

「うん？勿論。じゃなきや、キミみたいな雌豚のところになんて来ないよ」

「め、雌豚って…」

「どこでも発情するんだから、雌豚で十分でしょ？馬鹿弟子」

「まだ馬鹿弟子でお願いします…」

私はがつくりうなだれた。

それをウィルドは笑って、手に持っていた麻の袋を私の方に投げたよこした。

「これは？」

「もうすぐアエスタスの季節で、祭があるんだ。」

馬鹿弟子には、魔術師として参加して貰う必要があるってわけ。で、その衣装と杖」

確かに袋の中身をあげれば、青と白を基調とした衣装と、何故か雪の結晶とモチーフにした杖が入っていた。

「キミのその風貌は目立つから、そのインキュバスにでも変化の術をかけてもらえないよ」

ふわあとあくびをしながら、ウィルドは顎でバディを指す。

「オレ好みに仕上げても構わないのか、”銀色の魔術師”よ」

もう魔術が解けたのか、あるいは自分の力で跳ね返したのか、バディストが許可なく喋りだす。

気のせいか、琥珀色の瞳が爛々と輝いている気がする。

「違和感なく仕上げてくれるなら、僕はなんでもいーよ。」

祭は明後日からだから。じゃーね」

まだ眠いのか、低血圧のウィルドは、
ひらひらと手を振って部屋から出て行った。
がんと音を立てて派手に壁にぶつかる音が聞こえて来た。

「眠いなら、わざわざ朝に来なくても……」

「イノリの寝顔でも見に来たんじゃないのか？」

「それはないよ……」

きつと、私をからかいに来たに違いない。
いや、いびりに？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1336s/>

もし私が扉を開けたら ~ Si j'ouvre une porte ~

2011年10月30日03時19分発行